

昭和二十四年九月十五日發行（毎月一回十五日發行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可

慈

光

第一卷・第六號

目次

無碍の一道……………	白井成允……………1
懺悔の悲しみと後悔の悲しみ…山下成一……………5	
回顧四十餘年……………	藤等影……………8
信の旅行く人々……………	花田正夫……………10

無 碍 の 一 道

前の時間には佛様の御慈悲の心に就いて、涅槃經を讀んだ時の感想を述べましたが、觀無量壽經の中にも、佛心者大慈悲是也とありますように、佛の絶對の慈悲を味わって貰うことが一番大事なことでありませう。聖徳太子様は慈悲を註釋されまして、慈心與樂、悲心拔苦、即ち、いつくしみ、あわれみの御心をもつて苦を抜き樂を興えられることであるとされました。

さて苦樂とは何でありませうか。これは佛様が申されることで、無明の煩惱を本源とした迷ひの凡夫が感ずる苦樂ではありません。私共が楽しいといつて喜ぶことは苦の初めであると菩薩方は申されています。例へば十圓の籤で十萬圓當つたとすると非常に喜ぶのですが、これもよく反省せねばなりません。先日も中学三年の私の末の子とこのことで議論しました。「十萬圓籤が當るといいなあ」と末の子が申しましたから「十萬圓、百萬圓當ることが何故いいのだ百萬圓籤が當ることは惡魔が飛び込むのだ。自分の食欲の惡魔が躍り上つて喜ぶので、その結果自分の胸の内はすさんでしまふ、いいなあ！でなくて悪いなあ！と言はねばならぬ」と私が申すと「それは國が何故こんなことをするのか、それで國の財政が立ち行く爲めだ、買わぬと立ち行かぬ」と抗議しますので「それもさうだが、買つて百萬圓が當つたらその金をどうするかが問題だ。自分が汗し

白 井 成 允

て働いた報酬として頂いた金なら正當であるが、籤で當つた金はさうではない、澤山の他の人々、百姓の人や鑛夫の人が汗にまみれてこしらへた金だから、この百萬圓は怖ろしい金だ、惡魔となるのだ。若し當つたら自分の欲望を満足させるために使つてはならぬ、社會事業とか宗教とか、教育とか、免に角社會國家に役立つように使うべきだ、するとその金が惡魔でなく善神の働きをするようになる。然しそれでも俺は私利私欲のために使わなかつた、社會公共のために使つたのだ、俺こそ立派な人間であると又すぐ惡魔になつてしまふ。然しかやうな清淨なことが人間として出来るであらうか、我執の離れ得ない俺、何處までも欲望を追う俺、この俺が／＼の醜い姿を南無阿彌陀佛でのがれさせて頂く外ないのだ」と申したことであります。

歎異抄に「念佛者は無碍の一道なり、そのいはれ如何となれば、信心の行者には天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし、罪惡も業報も感ずることあたはず、諸善も及ぶことなき故に」と仰せられたことをこんな例で味わゞされることであります。此の席で申そうとすることは前の席で申し上げた、佛の大慈悲が中心であります。佛の御眼より凡夫が晝夜朝暮に身心を勞して求めてゐる一切の樂しみを佛は苦であると觀じ給うてこれを抜き眞實の樂を興え

て下さるのが佛の御心であります。この佛の慈悲を本當に頂くには南無阿彌陀佛のお念佛一つであることを申し上げたい。このことを徹底してお教え下されたのが親鸞聖人でありまして、有名な教異抄二條に示されてあります。

關東から京都までのちがけでのぼつて行かれた方々は私にとつて誠に有り難いことでもあります。あの方々が居られたればこそ私が聖人の信仰の至極をお聞きすることが出来るのであります。

聖人は今生の再會を期し難い關東の人々を前に、ありのまゝを告白せられました。

「親鸞におきては、たゞ念佛して彌陀にたすけられまいらずべしと、よきひとのおほせをかぶりにて信するほかに、別の仔細なきなり」聖人の御信心は、たゞこれだけでこれをよく味わして頂くことが大切です。

「よきひとのおほせをかぶりにて信するほかに別の仔細なきなり」と法然上人の仰せのまゝにする！これが法を求めぬ態度であります。この人によつて生死を出づべきと思つてお遣ひする、全人格をとつて信頼出来る人に遣う、これは實に容易なことではありません。本抄第三條では五六人か多くて十八までの方々が、さういふよき人を求めて、親鸞聖人に自分の生死出づべき道を聞かせて頂いたのがあります。聖人の全人格を慕うて、ほんとうにはる／＼と十餘ヶ國をこへて上つて来たのである。眞に道を求める者はこうなくてはならぬが、私共は誠に横着になつています。

さて聖人は御自身がおきゝになつたまゝをお答えになる。息帥法然上人の御言葉「たゞ念佛して彌陀にたすけられまいらず」である。これはどういふことでありませうか、この文を二つに分けて考えま

たゞよき人の仰せのまゝに純粹に念佛する、たゞ念佛申すのであります。自分の力で念佛しこの功德で往生する様な念佛ではありません。自分の方を省みますと煩惱具足の凡夫で清い心で念佛は申せません。縁にふれ折にふれ、俺が／＼の我執が出て凡てを穢して行きます。俺があゝしてやつた、俺がこうしてやつたとなつて折角の善が毒となつて了ひ、そうしたことしか爲し得ない私を、佛かねて、し、召して、煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくの如きのわれらがためなりけりといつて下さるのです。何時までも煩惱具足の凡夫としてはどうしても生死をはなれることは出来ないで、苦惱の三界を輪廻するより外ないのが可哀相だと仰言る。こゝに佛の慈悲があり、こゝに佛の願があります。この私の重病のことをお察し下され、我々の心の奥底まで見抜かれての上に、その故にこそ本願をおこして下された點が彌陀佛の本願が諸佛に超え勝れていられるところでもあります。

私が深く感銘している話に、明遍僧都の物語がある。僧都は眞言宗の高僧で高野山に居られました。當時法然上人が選擇集を著わされてしきりに念佛をお勧めになつていましたが、僧都はこれを聞かれて、法然の教も勝れているが偏つてゐる。八萬四千の佛説を念佛一つにとりきつて、他を捨て、擱くことは如何にも偏奇である。坐禪もよい哲学でも陀羅尼でもよいといふべきだと考えられて、選擇集の反駁論を作られていた或夜のこと僧都は夢をみられました。それは四天王寺の門前に澤山の病人の乞食が群つてゐる、そこへ寺の階段を黒衣の僧が下りて来て、鉢から粥をくんで病人に與えていた。如何にもその殊勝な姿に驚いた僧都は、あの尊い僧は、何人かと側の人にきかされると、法然上人ですと、僧都はハット驚るい

すと、「たゞ念佛申して、その結果御淨土に參らせて頂く」即ちお淨土に參らせて頂くためにたゞお念佛申すと、お淨土參りの手段としてお念佛申すと、この生死の苦海はしばらくで、やがて死ぬる、死ねばお淨土に迎えて下さると言つて腹をべつてゐる。こんな風に味うと聖人の御本意から遠く離れて了う。戰時中、東京の某有名人がラジオで放送されていたのを思い出すが「淨土眞宗の門徒はふとどき者である。自分が死ねばお淨土に往く。自分ばかり往くので個人主義も甚だしい。日本人とは稱正成のやうに七生報國であるべきなのに、自分一人が往生安樂國とは以ての外だ」と言つていた。これを私も聞きましたが、第一に門徒の者が淨土往生の教を御開山様の教と異つて自墮落に陥つてゐることはよく反省せねばならぬけれども、其の叱咤は親鸞聖人の教に對しては當つてはいません。聖人の教は利己主義の往生を垂れられたのではありません。曇鸞大師でありましたか、「お淨土は快樂のひまもない所と思つて、そこへ參らうと思つて信を求めぬ者は、眞実の淨土に往生することは出来ない。彌陀をたのむ者こそ往生すると説かれ、蓮如上人も同様のことを教えられています。我々の煩惱、欲望の延長が淨土ではありません。こんな欲張りの念佛は如來のいのちを穢すのみで誠によく反省せねばならぬことです。

以上は聖人の御言葉を、原因結果というやうに二つに分けて考えるからであります。二つは一つことなのです。「たゞ念佛して」それだけで充分です。又「彌陀にたすけられる」それでもよいのであります。同じことを二度御親切にも繰り返して下さつたのです。往生の手段として念佛するのでは自力念佛となり十九願廿願の化土往生となりません。

て夢から醒め、不思議な夢のことを深く考えられました。人が達者でいる間は柿でも梨でも食べられるが、重病人には粥以外は滋養物はない。法然上人の勧められる念佛は、この粥であつたかと深く身に沁んで感ぜられた。坐禪や哲学、布施の行、父母孝養の行等は健康な人、心の健やかな人には出来るが、煩惱具足、熾盛の重病人にはそれは出来ない。戒律を守り道徳に遵うことも出来ない。いづれの行も修め遂げることが出来ない。初めは割合清らかな心で行つていても、何時しか心の病が出て来て、遂に穢して了う。中々徹底は出来ない、この重病八のためには念佛ばかりである。南無阿彌陀佛を稱えることはどんな人にも出来る、惡逆の凡夫も、愚痴の者も、一切の救われる道であると深く感ぜられて、法然上人が自ら愚痴十惡に飯られて、お念佛申されつゝこれを一切人にお勧め下さることは誠に慈悲の至極であるとなつて、遂に僧都自らも念佛行者となられました。

その後僧都に一つの疑問がおこりました。それはお念佛は申しても心は常に散亂してならない、すが／＼しい心で念佛が出来ないことであつた。そこで僧都は京都の法然上人を尋ねられて日頃の不審を問われました。先づ第一に「生死出づべき道はどうしたらよろしいか」と尋ねられると「お念佛一つです」と答えられる、「私もさう思いますので念佛は申して、心が散つてどうにもなりません。一體どうしたらよろしいでせうか」と問われると「そのことは法然も力及ばぬことで、目が横につき鼻が縦につく様に、散亂するのが凡夫の自然であつて見れば、これをどうかしよとすること、何が身の程知らぬ大それたことでもあります。如來の本願念佛はこの如何とも爲し得ぬ者のためにおこされたのです」と答えられると、

僧都は涙を流して非常に喜ばれて歸られました。その後の法然上人の御法語にもありますが、「人間の心は本來散り亂れるものである、これを無くして念佛することは出来ないことであるから散つたら散つたまゝお念佛申す外にない」と述べられています。もとより法然上人の胸に煩惱がギツシリ詰つて渦巻くというようなことはないのせうが、聖人の内に輝く佛智は些少のことも誤間かせぬ様になられたのでせう。ここに圓熟され、ばされる程、凡夫の自性を愈々明らかに御自覺下されて益々お念佛一つに皈られたのであります。

御佛の御智慧から、我々凡夫の無明を根元として、終に觸れては妄念妄想にとらへられて散亂放逸し、自らも害ね、人をも害ねて、永遠の流轉を續けるより他にないことを見抜かれて、斯る者をこそ救い遂げずばやまぬという御願が凝り固つて、法藏菩薩の願行となり、南無阿彌陀佛と現われ給うたのであります。佛の慈悲の御心が凝り固つて法藏菩薩となり、謗法闡提の罪深い者をも救い遂げずばやまぬという本願となつて南無阿彌陀佛を成就して我々にお與え下さるのであります。

前に述べました涅槃經の善星比丘の物語であります。佛の子である善星が佛の教を捨て、佛に叛いて闡提となり、自ら作る罪業の故に遂に地獄に墮ちると、佛は善星と共に地獄の苦難の中に降り立たれて比丘を救い遂げられる。この佛の御願が大無量壽經では法藏菩薩の願行となり、「願以て力を感じ、力以て願を就す」、かくて願行具足の名號となられたのであります。

名號の二字を聖人が解釋されて、因位のとときのなを名という、果位のとときのなを號という、と述べられている意味が私には中々判りませんでしたが、自然法爾章を繰り返し拜讀していますと、この章に

懺悔の悲しみと後悔の悲しみ

人生の行路に於いて、專志と違ひ思いに任せぬ場合には、自分の運命の拙きを悲しみ、防ぎ得べかりしと見し拂逆の事を終に逃避し難かりし自己の不敏や四圍の非を嘲ちつゝ、残念に思い、終には悲憤し得ぬまでに行きつゝ、心の遣り場所に苦しむ事もないでもありません。かくて過去を省みつゝその失策に心を燒き愚痴の涙をしぼる苦惱の状態に外なりません。之を「後悔の悲しみ」と申して置きます。

然し「懺悔の悲しみ」ということは、凡愚人が一旦信を喜び、信に生きる身に轉じさせて頂いても、我が思いに任せぬ事件にあえば相變らずヤルセなく悲痛するより外ないのでありますけれども、その悲運を時代や他人の勢に負はせしめず、久遠劫來迷いに迷い來れる我が宿業の結果に外ならないと雄々しくその宿命に安んじ、事實を事實として認識し落ちついてその業を負ひ得る余裕を恵まれるが故に、悲しみつゝも悲しみに執らるゝ事なく、随つていつしかその焦燥の情も消え失せ、新らしき創造の天地に進み得る幸慶を窺見し得る妙消息をはらんで居りますから、何時も暗雲にとさされてる後悔の情とは雲泥萬里の差があります。換言せば後悔の悲しみは行きつゝまに憫む底深き悲しみであるに反し懺悔の悲しみはその根源が佛力の故に已に解決ずみの悲しみであり、悲歎しつつも愚痴にかえ

如來の御誓という言葉が何遍も出て参りますので氣付かせられたこととあります。如來の御誓の故に行者のよからんをも悪しからんをも思はずして自然法爾に救われて行くので、南無阿彌陀佛がその御誓を実現して下さるのであります。「さればそくばくの業をもちける身にありける」ところに如來の本願の因があり、この願をなみ／＼ならぬ御苦勞によつて成就して下された果が南無阿彌陀佛であります。即ち單に佛の慈悲として味つていられるのではなく、佛の願行として名號を味つていられる、即ち大字の徳となつて與えられ、久遠劫から救い遂げんとする佛の願行を味つて居られるようでありませう。生死の海にはてしなく流轉するより外ない一切の衆生が一入獲らず涅槃寂靜の淨土に救われて行く道を名號六字に現わされたのであり、誓願一佛乘とはこの意であります。

誠に生れ難き入界に生をうけ、然も眞実の教法は聞き難く、難中至難無過斯難と示されてありますが、これよき師匠に遇つて聞かせて頂けることは有り難いこととあります。南無阿彌陀佛の中に無碍の一道が開かれて行きます。先日某參議貴の方の話では「米ノ關係が三四年の間に最悪の状態に入るかも知れないが、今や日本八は長い戦と敗戦によつて重病病人になつて居るが、この難局を打開するには八千萬の同朋が心一つにして全力を盡くさればならぬ」とのこととありますが、この理想を実現するには聖徳太子の「佛乘の教が深く身に沁みて味わされませう。聖人の誓願一佛乘も同じ意であります。各々の入がその場／＼を守り、究極にお念佛を味ひ乍ら、嵐の中に堪えてゆく、その全体が南無阿彌陀佛の名號の働きであります。人類永遠の眞実の平和も念佛の一道に招來させませう。今度七戦犯の方々が、きびしい裁きの庭に立つて、恨まず憎まずお念佛の中に安らぎを得て、永遠の平和も淨土に見出しつゝ、從容として死につかれたことも尊い姿であり、眞の平和の光をそこに見出されるのであります。話はずきませんが今回はこれで終ります。靜かに御聞き下さいまして有り難う御座いました。

山下成

一

らない凡愚現實相の反省に外なりません。然もその悲しみの深いだけいよ／＼却つて佛陀の限りなき悲願の同情に活き歸らせて頂けるのであり、行きつゝまに／＼行きつゝまらぬ風光の自ら恵まれてる法悦境と申してもよいと思つてあります。悲痛の余りに泣くにも泣けない後悔の切なるに比し、佛力に安んずるが故に凡愚の業身をそのままに泣くべき時に安んじて泣き得る事は有り難い事とあります。

往年私が上京の序、故近角先生を訪うて、久潤を拜謝しつゝありし時、嘗て日露の役で旅順で戦死せられた眞鍋中將の未亡人が來會されての悲涙の物語であつた。御主人戦死の當時七歳の一八兒を身命かけて愛言愈らず、當年大学を優秀の成績で卒業させられたのであるが、令息が沼津で母校の水泳練習に助手として水泳指導中、海水が耳底に入つたのが原因となり腦膜炎を急發せられた。未亡人は急報に接して取るものも取りあえず馳せつけた時は最早生ける死骸同様の病態であつた。早速大病院に移し百方手を盡くされたが、四十有餘日の間、一回母を見る力も、一言を發し一言を聞く力もなく俄に夭折されたのであつた。未亡人の悲痛は如何ばかり深刻であつたこととせうか。幸に同未亡人は已に多年近角先生の慈教を仰がれて法喜の人でありましたが、自ら一方ならぬ苦衷を先生に訴えつつ慟哭するものであります。先生は慈眼愛語して宜はく、

「如何にも悲惨な御運命です。泣いても泣き足りないでせう。大慈悲の憐存しますから凡愚身のまゝに腹ふくるゝまで御泣きなさい。然しその悲涙もいつしか止むときがありませうが、佛様の尊姉の悲運をあくまで御同情下さる御涙には限りがありません、誠に有り難いではありませんか……」と。

私は此光景をまのあたり拜見して、母堂の苦痛に深い御同情を申し上げつゝも、しばし言葉もなく、凡愚人の現實相のまゝを、あくまでお捨て下さらぬ大悲の御心を先生の慈訓にきかせて頂きました。

泣けるとき泣くより外なきは誠に業報であります。然し泣きに泣く姿は必ずしも美しきものとはいへませんが、泣くにも泣けない心で苦しむ行き詰りを、何もかもかねて知ろし召しあぐまで御同情下さる慈懷に遇いまつればこそ安んじて泣きうるのでせう。誠に業のまゝに往くより外なき我が宿業に打ち任せつゝ深く懺悔し得ることは何と有り難い事でありませう。人間の涙のつきる時があつても、大悲の涙が盡くる折がないとの大悲の願心聞きまつりては自ら涙も乾きて知らず、破顔微笑に轉じ来るのではありますまいか。

次に祖聖は歎異抄第二條に「何れの行も及び難き身なれば地獄は一定すみかぞかし」と宣らせられてありますのは誠に悲しむべき祖聖自らの罪業を深く懺悔し悲歎し給ひし御告白に外ありませんまいがそのこゝに導かせ給ひし法然上人の慈訓を仰いで大悲一つにその宿業を残るくまなく解決せられし安らかな祖聖の御心情より靜かに祖聖自らの現實相を残るくまなく省察し給ひて、赤裸々深くその愚舌を悲歎し給ひし懺悔の言葉であり、直ちにそれが祖聖の宿業感であらせられ、「兎の毛羊の毛の端に居る塵ばかりも作る罪の宿業」に外ならず、一切の行爲が悉く地獄の業に外ならぬ事を漏らされし所

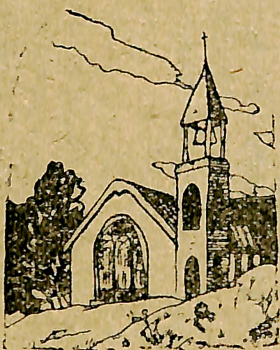
以であり、祖聖の現實相を現實相のまゝに認識せられ、その一切の業を雄々しくも負うて立たれた相が直ちに「地獄は一定すみかぞかし」と述べさせ給ひし所以ではないでせうか。實にや祖聖は法然上人

の慈教を仰いで大悲のいみじき光照を体解し給うて一切を解決し給ひし底なき落付の天地に座されてこそ祖聖自らの地獄一定の業報を赤裸々に發見せられし所以であつて地獄の業を懺悔し給ひつゝも已にその業報を超えて慈光を讀仰し給ひつゝありしわけであり、心は淨土に住み給う所以が直ちに地獄一定を敷せられた事でありませうか。地獄一定とは實にや地獄を超えて極樂への往生人とならせ給ひし法喜の叫であつたのでないでせうか。次に更に「念佛して地獄に落ちたりともさらに後悔すべからず候」とのべ給ひし一文の中にある後悔という文字こそ深く感服せねばならぬ事と思つたのであります。自力の行をばげみて佛になるべかりける祖聖にてましまし乍ら誤つて法然上人の言に欺かれて墮獄せしものとせば如何にも残念であり「後悔も候はぬ」ですが、何れの行も及び難き深い自覺に於て到底極樂に往生し難き自己の罪業を洞見し給ひし祖聖には地獄に落ちるのは當然でありと晏然としてその業に安んじ給うて別に殘念の歎、後悔の涙が残るでありませんか、地獄一定の歎が直ちに得涅槃分の妙消息である事を御よるこびありし所以なりしかと恐察するのであります。

抑々人生を経験して行くに當り色々困つた事に行き當り、之を解消せんとしても俄に解消し得ぬ事に悲痛を感じるのであります。百万その解消の法を講じ乍ら終に發見し得ざるに當りては、自暴自棄するか、又は大法に歸して大悲の眞實を呼吸し跡形もなく之を解消させて頂くかの二途よりないのであります。

抑々「後悔の悲しみ」や「懺悔の悲しみ」のないという事は終に

人生生活が無心というてもよいと思つたのであります。「後悔の悲しみ」を御縁として終に大法に救われ、事に轉じ「懺悔の悲しみ」を通していよ／＼深く大法の眞諦を学ぶ事になるのであつて見れば、人生の悲痛こそ眞に人生生活に活を興え眞生命を發見せしむる尤も大切な契機と申すべきであります。然し後悔の涙が開法により懺悔の涙に轉じさせて頂くことを先途とし、信前も信後も相變らず己れが宿業に涙する外ありませんが、信前の涙は宿業が未解決に残り愚痴に終始する外ないのに對し信後の涙は宿業の非懺悔することそれ自身が宿業を雄々しく負うて事實に相應しつゝ安んじて生き得る事であり、兩者の間に根本的な相違があることを知れば、共に宿業のまゝに生きつゝも、前者は苦しみ、後者が樂しみにまで轉ずる事は一大精神的の革命でないでせうか。唯々仰ぐ如來大悲心一つ、本願力一つ、具体的にいへば念佛一つであります。



一茶の句集より

月花に四十九年の無駄あるき

これがまあついの住家か雪五尺

明月の御覽の通りの厨家かな

苦の娑婆や花が開けば開くとて

とも角もあなたまかせの年の暮

あばら家のその身そのまゝ明けの春

回顧四十餘年

藤 等 影

今は早や八生の結論に到達して、唯圓大徳のお言葉通り、「露命僅かに枯草にかゝりて」で、日々淋しい思いで送っています。

それは私の三十歳前後の事です。當時自分は鹿兒島刑務所に教誨師を奉職していました。或年の夏、當時建築中の石造監獄工事中だつた。流行病の赤痢患者が入つて来た。その爲蔓延して、相當數多く死亡する者が出来た。人間の一生を終るに、こうした場所に行く者は一段の悲哀を感じさせらるゝ、この八々としてそう悪徒ばかりではない、もう出所近い僅かな日を待たないで娑婆立ちする人もあつた。何と云つても、八生の最後は、宗教の世界、信仰の慰安より大なるものはない。私が別に保證する事でもないが、淨土往生間違いないと言いたい者も、少くなかつた。これに反して、私に一つの疑問が起つた。それは斯くして人に教化することに、祖訓を遵奉して諭すに間違はないが、自分自身は全体どうなるのか、萬一川渡の船頭であつては濟まないが、茲に安心上、「タノム」「信ずる」と云う點に疑問が起つて来る。

それと前後して未だ五十三歳の元氣な父が、急に病床の人となつて僅かな間に逝くなつたので、刑務所も辭し歸坊して寺務に當ることとなり、其の他色々の事情で、身心の安定を得ない日を送るうちにも、矢張り層層信仰問題の解決を盡んでいた。自分の希望は、宗学

この横着な私の爲に、朝の八時頃から午後の三時頃迄、あの親切の權化と言わるゝ先生は、縦から横から裏から表から、それこそ百法手を盡してお諭し下さつた。余りに熱心に説き聽かして下さるので、何だか解らぬまゝで、諒解した様にお答えしようかと思つたが否や待て、三百里の遠方から態々何の爲に訪ねて来たかと、自叱してはお尋ねしていた。

遂に先生は、「御本典」の信卷の三信釋を開いて、さあこゝを御覽なさい、至心、信樂、欲生、この三信の御自釋に、聊かお言葉遣いは異つていても、何れも一貫して居るのは「疑蓋無雜」即ち「一切の群生海、無始より已來、乃至今日今時に至るまで、穢惡汚染にして清淨の心なし、虚假誦偽にして眞實の心なし……善薩業を行じたまいし時、三業の所修、一念一刹那も清淨ならざるはなし、眞實ならざるはなし」こゝです、今更私の手許に何が出来ませう、無始よりこの方、乃至今日今時、今の今ですよ、明日に成つても、三年先になつても、娑婆存在の其の間は、清淨、眞實の心は露さら無いです、助け手の親様はその反對、身口意の三業、一念一刹那も、清淨眞實でないことはないのです。斯う信ぜられたまゝを、タノムとも、彌陀を信ずるとも仰せられたのです。——こうした御教化に諳々と接している間に何時とはなく夜の明けたと云うてよい、頭が軽くなつたとも言ふべきか、誠に苦が抜けたよになつた。さてその翌日お禮やらお別れに行つて、世間話の一口二口して居ると、先生は「藤さん往生の大事に安心が出来ましたか」と、この一言こそ、近角先生の先生たる親味の尊さであると、今もこうして書きながら、追慕の涙が浮び出ます。

それから後は、普通の説教聽聞しても、讀むも聽くも、法縁なら

者の学解や布教僧の口説ではなく、眞實の信仰に篤い方のお諭しに接したい事であつた。

遂に時節到来と言うものか、當時東大に学んで居た舍弟等忍を縁に、求道学舎に近角常觀先生に教を乞ふことが出来た。またその時の模様は眼前にあつて忘れないが、思えば四十余年の昔、今は先生も此土にはお出でにならない。それから先生には二度お目にかゝつて居る。鹿兒島大派別院講習會と、東京震災後、私が北海道の歸途求道會館をお訪ねした時、もうその時は先生は中風性にかゝられていた。またの御縁もと考えてお別れしたのであつたが凡情の愚かさ今更の如く悔まれる。

さて始めて先生をお訪ねした時は、今から思うと幼稚な考えだつたが「タノム、信ずる」という事が、どうか、どうぞと、祈願請求の思いでないことは、十分承知しているのだが、救わるゝ自分の手許はお留守にしておいて、助ける親様のお手許に不足を感じ、タノムンでも、信ぜんでも、そのまゝ、救うて下さりそうなのをと、所謂、無歸命と言うか、無安心と言つてよいか、誠に恐れ多い我儘ごとです。ともすると、今でも私同様な疑問を抱く人があるかも知れん。だからして何かの御参考にと、こんな無駄に似た事を綴り出した。

ざるなく、念稱佛恩の日を送りましたが、何時頃よりか稍世間に名を知られたり、人間生活に迫りまくられて、淺間しい日送りばかり、何を語り何を説きしか過ぎしわれ空しく暮るゝ悔いごころのみこれが今の晩年感である。

率直に言つと、先生の講話なり、また、お書きになつた物は、稍くどいと言う感じを持つていたが、だん／＼歳をとつて世相の實際に接すると、「眞實の言葉はくどい、くどくなつては、眞實は通らない」親の言葉のくどさは誠から出るからである。それが最初はそうとは思われなんだ。凡情の淺間しさが解つて来る。

明石海人詩集より

癩

十年前隣人が私の生存を憎んだ

五年前はらからが

今では自分自身が

残るは唯一人の母親だが

涙ながらに生きていよと言ふ

信の旅行く人々(その二)

花田正夫

太平洋戦争の末期、軍醫として應召、沖縄の地に散華せられた信友林田法契を偲び、法契の證しせられた信の光が地に輝くようにと念じ乍ら筆をとりました。

「へだて」と「まこと」

林田氏は生れて六才、妹さんが三才の時にお母さんが不縁となつて歸られたので、次の母を迎えられ、實母も何處かへ再縁された。初めの間は別に問題もなかつたが、次の母に二人三人と子供が出来るにつれて所謂養理の間のへだて、心が段々と深められて行つた。―私共はこうした時、何時も繼母が悪いと考え易いものであるが、人生問題は決して一方のみが悪いのではなく五分五分であることを銘記せねばならぬ。母のない家に嫁ぐには大きな決心と悲壯な心構へで行くに相違ないが、人間の力には限りがある。子供は子供で母と聞けば産みの母を想像し、同様の愛を要求する。かゝる加えて親類縁者が冷い眼で常に監視している。そこを超えろには、超人的力、信の威力がなければ行き詰るのが當然であろう。痛ましい人生の惨事である―さて林田さんは幼い時早くもこの惨事に當面したのである。其の後中學を卒える前に校長に呼び出されて將來の希望を聞かれた時も、家庭が面白くないから大阪に出て勤へとなり妹と二人で生活したいと答えると、それも悪くはないが成績も良いのだから大

からぬ自分と妹を捨て、母は何故に去つたのかと思つと、たまらなくなつて二階にかけ上つて聲の限り泣いた。それから親子陸まじげに歩く人を見てさえ石でも投げてやりたいと言ふ衝動にかられるやうになつた。

其後京大の醫學部に入學されると先づ宗教による解決を求めて基督教の門を叩いた。ある日「敵を愛せよ」の題下の講演を聞き早速牧師さんに「自分は敵どころではない、生みの親をのろつてゐる。然し何とかしたいがそれが出来ないで苦しんでゐる」旨を告げると「神に祈りなさい、神はあなたの心を和らげて下さるでせう」と勧められたが、親を恨むようにならずに心では愛の神を思ひ浮べることさへ出来ない、どうしたらよいかと色々苦心されたが半年を経つとも宗教にも断念して、酒で誤間かす外にない苦悶を酒で慰めようとしたが、酔いの醒める時何とも言えぬ寂寥が胸をいためた。其の後友人の川畑さんの勧めで羽溪博士の佛教寮に入られ、佛語に親しまれるに及び、三誓偈の一句「我無量劫において大施主となりて諸々の貧窮を救はずば誓うて正覺をとらじ」の節に及び、特に自分程の心の貧窮人はないかこれを救はずば佛にならないとの生命にかけての御誓いをきき、して見れば自分のようなあさましい者もたすけられる道もあるのかと漸く心の蓋が動いて、歎異抄を身讀されるに及び、ことに第三條の「煩惱具足のわれらはいづれの行にしても生死をはなるることあるべからざるを憐れみたまいて願をおこし給ふ本意、悪人成佛のためなれば」の一句に遂に念佛されるようになった。

たとえ親子と生れ乍らものろべき縁にあつてはのろわずには居られない煩惱具足の私を、それがいかにも不愜であると仰せ下さる

學まで行くようにと勧められて大阪高等學校に入學した。希望は満たされたが家庭を出て寄宿舎に住む林田さんの胸に黒雲のやうに擴がつて心を暗くさすのは妹さんのことであつた。獨りでどんなにか淋しい生活をしているかと思つと堪らなくなつて勉強も手につかなかつた。

林田さんは獨りでよく考えた。今の自分としては身体を大切にしようとしてよく勉強して大學卒業の驕に妹を迎えてやる外はない。それにはこんな暗い心では駄目である。先づ運動をしようと考えてテニスに乘馬に放課後は専念した。然しこれも運動している間だけのことで獨りで机に向つるとまたしても妹の事が苦になつてならなかつた。今度は音楽でも習つたら心が和らぐかと思つて練習したが、これも駄目であつた。そうこうしている内に高校の三年になつて大學の入學準備を下宿の二階にもつてしていると、下宿の小母さんがしきりに呼ぶので下りて行つてみると、猫が子を産んだ、可愛い猫だと言るので小屋に入つて見ると三匹の仔猫を抱いていたので、一度手にとつて生れたまゝの仔猫を見ようと思つて手を出すも親猫は我子を獲られると思つたのか、爪をむいて飛びかゝりさうにした。林田さんは思はず手を引いた刹那に思ひ出したのは實母のことであつた。猫でさへ子をかばつて人にまで飛びかゝつて來るのに、西も東もわ

佛の御本願をきき、文句はありません念佛ばかりですと白道の人となられたのでした。

その後生みの母の嫁ぎ先に手紙を出され、京都に迎えて三日間聖人の聖跡を巡り、廿年に近い人生問題に初めて晴天白日を仰がれるようになられたが、卒業後の結婚生活も奥さんが子痴で急逝し、醫博も得られたが次の奥さんが再び病死され、第三の奥さんを迎へられ、今度は自分が戦死となつたので、まことに生活は慘憺たるものであつたが、常に「お念佛をようきいて、この念佛に護られ支えられて生きてゐる」と述懐して居られたものを、惜しくも人生の半ばにして散華されたのであつた。

私は林田法契を偲ぶごとに、親と子のへだて、心に惡戰苦闘の結果刀折れ矢つきで、閉口頓首のところに佛の本願をきかれ、「他力の悲願はかくの如きの我等がためなりけり」と感佩されて、萬事解決し、踊躍しつゝ念佛されていた姿を思ひ浮べさせられる。まことに善に勝ち技ことの出来ない、常に「惡に負けて行く外ない私の上に、身を以て證しされた林田さんの信の光が常に輝くのであります。



あとがき

最近發送した雜誌が不着のまゝで返送もなく紛失するのが頗々ありますので驚いています、讀者の皆様は御迷惑をおかけしていかかと思われます故、不着の時は御住所、番地までを詳細に御記入の上御知らせ願います。

☆

△白井先生の御講話筆記文は、先生の御懇を傷つけ申すような箇所も多かつたと存じますが御賢察の上御味讀願います。昨年十月から二ヶ月間も胃病のため横臥された先生がまことに烈々たる氣魄の中に和顔慈語下された無盡の燈炬であります。三河方面の御講話も鈴木文熹君が筆記して下さり丁寧に清書して貰つていますので漸次記載させて頂きます。

△山下先生の懺悔と後悔の文は信の妙味を盡くされて餘りあると存じます。暗い後悔から明るい懺悔の生活もひとへに本願力自然の顯現であります。後悔は自我的部分的否定に起因し、懺悔は佛智による全自我の否定であります。開法のないところにはもとより後悔のみであります。幸に開法の縁に恵まれ乍らも所謂機なきの暗い影のつきまとうのは未だ否定されぬ自我の影であります。

△藤等影師は鹿兒島縣萬世町の方であります

慈光

第一卷 昭和二十四年九月十五日發行（毎月一回十五日發行）
第六號 昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可

が不思議な御縁から近角先生に遭われて開法せられた實録を送つて頂きました。御年七十三歳と承りますが御健在にて益々爲法御活躍の由であります。

△信の旅行く人々のその二は信友林田氏の入信記を誌しました。今はなき友を懐しみつゝ、血の滲む信の味を偲びました。

「道成寺舞が肌のぬぎ仕舞」の川柳に諷刺してありますように、我々煩惱具足の身の利害相反して行くところ露が肌の毒蛇が現われてそれがため自害毒彼して修羅の巻を展開するのであります。これこそ遠い昔から續け來り、これから先々までも續けて行く外にならぬ。我々の實体であります。この蛇の性は如何とも爲し得ぬことを佛は知悉されて、その故にこそ本願は建立されたのであります。「いづれの行にても生死をはなるゝことあるべからざるを憐れみ給うて願をおこし給ふ本意」がそこにありますのであります。「凡夫の悪しき心をそのまゝおきて如來のよき心を加へてよくめされ候」と拓かれて行くのであります。

紹介
月刊誌「渾沌」の八月號に白井成允先生の正信僞意譯が掲載されました。御希望の方は

愛知縣高岡局區内、渾沌社振替名古屋一三五二番へ定價二十圓送料三圓也拂込みの上御申込み下さい。尚渾沌誌は教育と宗教の雜誌であります。教育者の方に佳良誌と存じます。

昭和二十四年八月十日 花田 記

昭和二十四年九月十日印刷
昭和二十四年九月十五日發行
毎月一回十五日發行

定價 一部金拾五圓（郵稅共）
一年分金百八拾圓（郵稅共）

名古屋市昭和區幸樂町二ノ二十九番地
編集兼 花田 あや
發行人

名古屋市千種區千種町馬走二八
印刷人 本 伍 郎
名古屋市千種區千種町馬走二八
印刷所 千草印刷所

名古屋市昭和區内幸樂町二ノ二九
花田正夫方

發行所 慈光社
振替口座番號 名古屋一〇四七〇番